

立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所
第七號拔刷 二〇一三年七月発行

日本に於ける周瑜像についての一考察——江戸時代を中心に——

岡 本 淳 子

日本に於ける周瑜像についての一考察——江戸時代を中心に——

岡 本 淳 子

一 はじめに

歴史書『三國志』が世に出た後、様々な文人達がその中の人物を批評し、時に詩や詞、あるいは様々な文学作品に三國人物の故事を用いてきた。その後時代は下り、明代になって羅貫中が編纂したといわれる小説『三國演義』の登場により、それまで主に歴史書『三國志』の中からしか評價されていなかった三國の人物達が、新たな人物像の側面を持つようになるのである。例えば諸葛亮などはその典型的な人物の一人と言ってよいだろう。『三國演義』による蜀梟頂によって、彼は奇術師のような怪しささえ漂わせながら、常人とは一線を畫した超人的存在として描かれている。そしてその結果、彼を引き立たせる為^①に本来の人物像とは一轉して、狭量な人物として描かれることになってしまったのが周瑜である。この事は既に周知の事實であるが、しかし具體的にどのような人々に周瑜は「狭量」として捉えられてしまったのか。あるいは、小説『演義』が廣まった後も、周瑜本来の人物價値を見失わずにいた者はいたのだろうか。今回は、まず中國に於

ける周瑜像の變遷を概略的に述べたのち、日本に於ける周瑜像の變遷に着目してみたい。特に、日本初の『三國演義』の翻譯本である『通俗三國志』が刊行される以前と以降に大別し、その刊行時期である江戸中期以降を中心として論を展開していくこととする。

二 中國に於ける周瑜像の變遷について

先に述べたように、『三國演義』中の周瑜は、諸葛亮を引き立たせる為の、一種道化のような存在として描かれてしまっている。しかしそれまでの周瑜はどのような評價を受けていたのだろうか。日本に於ける周瑜像の變遷を述べる前に、まず中國に於ける彼の評價變遷について概略的に述べてみよう。

(一) 正史『三國志』中の評價

ではまず、正史『三國志』から周瑜についての評價が分かる部分を示そう。以下は呉書九・周瑜傳からの引用である。^②

是時權位為將軍，諸將賓客為禮尚簡，而瑜獨先盡敬，便執臣節。

性度恢廓，大率為得人，惟與程普不睦。

（この時孫權の位は將軍であり、諸將や賓客達は（孫權に對して臣下としての）禮を盡さなかつた。しかし周瑜一人が率先して禮を盡したため、彼らも臣下の禮節を守るようになった。周瑜の性格は大らかで度量があり、多くの人心を掴んだが、ただ程普とだけは不仲であつた。）

この部分から分かるように、周瑜はその性格や器の大きさから、人々から慕われていたとある。最後の程普とのみ仲が悪かつた點については、後に裴松之が『江表傳』を引用し、この件について補足している。以下はその該當部分。

『江表傳』：「普頗以年長，數陵侮瑜。瑜折節容下，終不與校。普後自敬服而親重之，乃告人曰，『與周公瑾交，若飲醇醪，不覺自醉。』時人以其謙讓服人如此。」

『江表傳』によると、「程普は年長者であることから、數ば周瑜を侮辱した。周瑜はその都度下手に出て、終始争うことはなかつた。程普は後に周瑜に敬服して、彼を親しみ重視するようになった。そこで人に告げて言うには、『周公瑾と交わると、まるで醇醪を飲んだかの如く、自らが酔ってしまった事に気づかない。』」と。當時の人々は、周瑜がこのように謙讓を以って人を心服させたことの例として、この出來事を挙げたものである。」と。『三國志』吳書九周瑜傳裴松之注

『正史』に於ける周瑜の形象については全てを挙げると枚舉に違が無いので一先ずはこの邊で止めておくが、彼の人物像は決して狹量な人物でないことはお分かりいただけるだろう。

（二）詩文中の周瑜の描かれ方

次に唐代以降の詩文作品にはどのように描かれているのかを確認してみたい。なお、六朝から隋までは『三國志』裴松之注以外では周瑜についての記述を確認できるものがほぼ無いので、ここからは唐代以降の作品について挙げていく。^③周瑜像に對する捉え方について、便宜上①軍事（主に赤壁について）・②藝術・③戀愛の三點から着目して見ていくこととする。

①軍事（主に赤壁）を描寫する作品

赤壁の戦いに關連した周瑜の描寫について、唐代から清代までの作品を列舉する。紙幅の關係上、全てを挙げることは出來ない。よつて主なものを數例挙げておこう。（以下の傍線筆者）

○唐・李白『李太白文集』卷六「赤壁歌送別」

二龍爭戰決雌雄，赤壁樓船掃地空。烈火張天照雲海，周瑜於此破曹公。
曹公。（二龍の爭戰、雌雄を決す。赤壁の樓船、地を掃ひて空し。

烈火張天して雲海を照らす。周瑜、此に曹公を破る。）

○唐・杜牧『樊川文集』卷四「赤壁」

折戟沈沙鐵未銷，自將磨洗認前朝。東風不與周郎便，銅雀春深鎖

二喬。(折戟は沙に沈みて鐵は未だ銷せず。自ら磨洗を將て前朝を認む。東風、周郎の與に便ならざれば、銅雀の春、深く二喬を鎖ざさん。)

○唐・胡曾『詠史詩』卷下「赤壁」

烈火西焚魏帝旗，周郎開國虎爭時。交兵不假揮長劍，已挫英雄百萬師。(烈火、西に魏帝の旗を焚く。周郎、開國、虎争の時。兵を交へて假せずして長劍を揮ひ、已に英雄百萬の師を挫けり。)

○北宋・蘇軾『東坡詞』「念奴嬌」

大江東去，浪淘盡，千古風流人物。故壘西邊，人道是，三國周郎赤壁。(大江東に去り、浪は淘盡す、千古風流の人物。故壘の西邊、人は道ふ是れ、三國の周郎の赤壁と)亂石穿空，驚濤拍岸，卷起千堆雪。江山如畫，一時多少豪傑。遙想公瑾當年，小喬初嫁了，雄姿英發。羽扇綸巾，談笑間，強虜灰飛煙滅。故國神游，多情應笑我，早生華發。人生如夢，一樽還酹江月。

○『東坡全集』卷三三「赤壁賦」

蘇子愀然，正襟危坐而問客曰，何為其然也。客曰，月明星稀，烏鵲南飛，此非曹孟德之詩乎。西望夏口，東望武昌。山川相繆，鬱乎蒼蒼。此非孟德之困於周郎者乎。(蘇子愀然として、襟を正して危坐して客に問ひて曰く、「何為れぞ其れ然るや。」と。客曰く、「月明らかなにして星稀に、烏鵲南に飛ぶ。此れ曹孟德の詩に非ずや。西のかたは夏口を望み、東のかた武昌を望む。山川相繆ひて、鬱乎として蒼蒼。此れ孟德の周郎に困しめられしところには非ずや。」と。)

○南宋・楊萬里『誠齋集』卷二〇「送周元吉顯謨左司將漕湖北」

又見周郎携小喬，武昌赤壁醉嬌嬈。蜀江雪水來三峽。吳苑風煙訪六朝。(又見る周郎の小喬を携へて、武昌の赤壁、嬌嬈に酔ふを。蜀江雪水、三峽より來る。吳苑風煙、六朝を訪ぬ。)

○元・趙孟頫『松雪齋集』卷五「畫赤壁」

周郎赤壁走曹公，萬里江流鬪兩雄。蘇子賦成奇偉甚，長教人想謫仙風。(周郎、赤壁にて曹公を走らしむ。萬里の江流、兩雄を鬪はしむ。蘇子の賦、奇偉成ること甚し。長く人をして謫仙の風を想はしむ。)

○元・馬常祖『石田文集』卷四「赤壁圖」

三國周郎赤壁西，江山雖好夕陽低。他年銅雀分香妓，猶恨回船戰炬迷。(三國の周郎赤壁の西、江山好しと雖も夕陽低し。他年銅雀に香妓を分かつ。猶ほ恨む回船戰炬の迷を。)

○明・張吉『古城集』卷六「經周瑜墓」

破盡曹瞞百萬師，建安遺叟望傳麾。可憐皎皎鍾山月，不照成都赤羽旗。(破盡す曹瞞百萬の師を。建安叟を遺して傳麾を望む。憐むべし皎皎たる鍾山の月、成都の赤羽旗を照らさず。)

以上のように、赤壁の戦いの主役は周瑜であると認識されていることは間違いない。しかしながら、小説『三國演義』が広まった後は、赤壁での主役の座を完全に孔明に奪われてしまっている。以下に顯著な例を示そう。

○清・鴛湖漁叟『說唐全傳』第六六回

火燒赤壁孔明計，爛額焦頭魏卒逃。(火燒赤壁孔明の計、爛額焦頭、

魏卒逃ず。）

右のように孔明が赤壁の第一の功勞者であるかのような描かれ方を
する作品は、小説『演義』が廣まった以降に顯著に表れ始める。小説
の影響を大きく受けていることが如實に證明されていると言えよう。

②周瑜の藝術性を稱える作品（「周郎顧曲」故事）

周瑜は音楽にもよく精通しており、以下のような記述が『三國志』
周瑜傳に見られる。

瑜少精意於音樂，雖三爵之後，其有闕誤，瑜必知之，知之必顧，
故時人謠曰「曲有誤，周郎顧。」

（周瑜は若い頃から音楽に精通し、三爵の後（杯が三度廻った後）
と雖も、その音楽に闕誤が有った場合は、周瑜はこれを聞き分け
て、奏者へと振り返った。故に當時の人々は『曲に誤りがあると、
周郎が顧みる。』と言ったものである。」と。）

この故事を元に、彼の音楽の才能の面を詠った作品も数多く作られ
た。以下にその一例を示そう。

○北宋・羅椅『澗谷遺集』卷三「柳梢青」

萼綠華身，小桃花扇，安石榴裙。子野聞歌，周郎顧曲，曾惱夫君。

（萼綠華の身、小桃花の扇、安石榴の裙。子野歌を聞きて、周郎
曲を顧るに、曾て夫君を惱ましむ。）○悠悠羈旅愁人。似零落、

青天斷雲。何處消魂，初三夜月，第四橋春。

このように軍人としてだけでなく、周瑜が文化人としても認識さ
れていたことが分かる。

③「周瑜と小喬」表現

周瑜と言えばその妻・小喬との逸話も詠われている。以下はその一
例である。

○北宋・鄧肅『栢欄集』卷一「詠史」

五湖范蠡携西施，三國周郎嫁小喬。蓋世功名聊唾手，何妨樽酒醉
妖嬈。（五湖の范蠡、西施を携へ、三國の周郎、小喬を嫁す。蓋

世の功名、聊か唾手して、何ぞ樽酒、妖嬈に酔ふを妨げん）

○南宋・沈與求『龜溪集』沈忠敏公 谿集卷二

三楚浮魂不可招，夢遊赤壁夜停橈。朝來快讀黃州賦，猶喜周郎得
小喬。（三楚の浮魂、招すべからず。赤壁に夢遊して夜、橈を停
めず。朝來快讀す黃州の賦を。猶ほ喜ぶ周郎の小喬を得たるを。）

またその後金・元代でもこのような表現が多く見られる。

○金・元好問『遺山樂府』卷五「南歌子」

人日過三日，元宵便五宵。共言今日好生朝。皓月光輝，香動玉梅
梢。○謝女工飛絮，周郎待小喬。年年燈下醉全蕉。髣髴蒼球，全

縷細鵝毛。（○謝す女工の飛絮、周郎の小喬を待つを。年年燈下
に酔ひて全蕉す。髣髴は蒼球にして、全縷は細鵝毛なり。）

○元・仇遠『無絃琴譜』卷一「小欄干」（眼兒媚）

苔箋醉草調清平。鴉墨濕浮雲。霓裳步冷，瓊簫聲斷，舊夢關心。

○小喬不戀周郎老，翠被摺（折）秋痕。那堪門外，黃花紅葉，細

雨更深。（○小喬は周郎の老たるに戀せず、翠（カワセミ）は秋
痕に摺（折）らる。那ぞ堪へん門外、黃花紅葉、細雨の更に深く

なるを。

主に宋代以降から、「周郎顧曲」故事、あるいは周瑜の妻・小喬と絡めて描いた詞や詩文が多く見られる。特に詞の中に用いられていることが多いようで、音楽に合わせて作られる詞と、音楽に精通していたとされる周瑜が題材として用いやすいという側面があったと思われる。宋代に於いて、政治（軍事）的に語られると同時に、周瑜はこういった藝術面や戀愛の面で語られる事も多いようである。

以上、三點の視点から周瑜の人物の描かれ方を詩文の中より見てきたが、特に彼を狭量な人物として描くものは見当たらなかった。

(三) 『平話』・雜劇中の周瑜

では續いて小説『三國演義』形成の過程において、缺かすことのない存在である『三國志平話』中の周瑜の描かれ方について、『演義』と比較しながら見ていくこととする。

『平話』において、周瑜は卷之中後半から登場するのだが、『演義』との違いを以下にまとめておく。

- 1、黄蓋が曹操の兵糧を絶つ策を提案すると、それを用いるに足らぬ策として（理由が判然としないまま）、罰棒六十打の刑に處す。これにより黄蓋は周瑜に恨みを抱き、曹操に寝返ろうとする。
- 2、曹軍に對する戰略について、孔明だけでなく、衆將に策を求める。周瑜と呉の將達の掌には「火」の文字が記されていたが、孔明の掌に

のみ「風」の文字が記されている。上の二點を『演義』と比較して見ても、周瑜がより小さい人物として描かれ、さらに孔明が特別視されている事が分るのではないだろうか。

また雜劇においても、周瑜の狭量さが描かれてしまっている。「兩軍師隔江鬪智」・「周公瑾得志娶小喬」・「劉玄德醉走黃鶴樓」の三本の劇をあらすじを追って見てみる。

○「周公瑾得志娶小喬」

あらすじ

主人公は周瑜。『平話』を元に作られたものと考えられている。周瑜は魯肅の弟分のように描かれ、まだ無位無官の頃から始まる。魯肅が周瑜と小喬の縁談を喬公に進める。ただし、周瑜が官位を得るという條件だった。その後、孫權によって兵馬大元帥の官位を與えられ、周瑜は小喬と結婚することとなる。

○「劉玄德醉走黃鶴樓」

あらすじ

主人公は孔明。こちらも『平話』を元に作られているものと考えられている。赤壁の後、周瑜が劉備を黃鶴樓での宴會に招いて、彼を捕らえようと謀る。孔明は糜竺を從者に姜維を漁師に變装させる等の奇策を用いて、劉備の逃亡を成功させる。以下、第四折から一部載せておこう。

（孔明云）三江夏口列英雄，赤壁焚燒百萬兵。周瑜漫使千條計，怎比南陽一臥龍。先借荊州地，後取西川白帝城。四方寧靜干戈息。

永保皇圖享太平。

ご覧の通り、ここでは赤壁の手柄が全て孔明一人によるものだったかのように描かれている。

○「兩軍師隔江鬪智」

あらずし

主人公は孫權の妹である孫安。赤壁の戦いの後、荊州を占領した劉備を討ち、荊州の地を奪おうとする周瑜。しかし、諸葛亮の策に幾度となく阻まれてしまう。そこで魯肅と計って、孫權の妹・安を劉備に嫁がせ、その護衛の兵と稱して荊州を奪おうと企む。その際、もしも荊州を奪取出来なかった場合は、安に劉備を殺害させるように諭した。劉備と諸葛亮は計略であると知った上で、この縁談を受け入れる。

周瑜は婚禮當日、甘寧・凌統に一千の兵を率いて荊州へと安を送り届けさせる。諸葛亮の計らいで張飛に城を守らせ、安と侍女のみを城に入らせ、呉軍の兵を一切締め出してしまう。その後、孫安は劉備・關羽・張飛・趙雲・諸葛亮等の名將達と知り合うことで、すっかり蜀側に身を委ねてしまい、周瑜の謀は頓挫してしまう。劉備と孫安は、夫婦揃って呉に里歸りすることになる。諸葛亮は劉封に衣服を届けさせた際、その中に錦の袋を隠しておいて、故意に孫權の前で落とさせた。孫權がそれを見ると、中に諸葛亮の手紙が入っており、「曹操が再び荊州を攻めようとしているので、この場はひとまず歸って欲しいという事、また呉に兵を借りたい」との事が書いてあった。孫權は急いで劉備夫婦を荊州に歸らせる。周瑜は、甘寧・凌統らを渡し場に遣って

足止めさせようとするが、孫安に一喝されて引き下がってしまった。その後再び周瑜は甘寧・凌統らと共に孫安の乗った輿を足止めするが、その中にいたのは張飛で、怒りに周瑜の矢傷が再び開いてしまい、卒倒してしまう。

以上、三本の雜劇を紹介した。「周公瑾得志娶小喬」では主人公が周瑜なので、彼を狭量な人物として描くことはない。しかし、脇役となり尚且つ諸葛亮が同じ舞臺に立つ「劉玄德醉走黃鶴樓」「兩軍師隔江鬪智」雜劇では、明らかに諸葛亮に良いところを持っていかれている。それどころか、小悪黨的な存在の人物に描かれている。つまり『平話』・『演義』と同じ描かれ方である。

土屋文子氏はこのような、諸葛亮を一方的に持ち上げる描き方について「他人物の故事を諸葛亮のそれに置換し、あるいは元來登場しなかった故事に諸葛亮を介入させる例は、「草船借箭」をはじめとする一連の赤壁故事や、周瑜との荊州紛争、あるいは「空城計」などの情節においてもみられる。」と述べておられる。(注1掲載論文参照)

ここまで、中國における周瑜の人物像についてその變遷を概略したが、唐代や宋代までとその後の『平話』や雜劇中に描かれる彼の人物像が、明らかに變化したことがお分かりであろう。この流れが『演義』における、狭量に描かれている周瑜へと引き繼がれてしまうわけである。『演義』中における周瑜の狭量さ加減は、紙幅の関係上一々列擧することはしないが、冒頭に述べた通り、孔明の引立て役として描かれていることは改めて強調しておこう。

では續いて、日本において周瑜は人々にどのような人物として捉えられていたのかについて述べていこう。

三 『通俗三國志』成立前の周瑜像

そもそも日本に歴史書『三國志』が舶來したのはいつなのか。明確な結論は今の段階では出ていないが、『續日本紀』神護景雲三(七六九)年、稱徳天皇が大宰府に『三國志』などの史書を送ったとの記述が見られる。この事から、日本に最初に傳來した時期は『續日本紀』編纂より前であった事は確實であり、少なくとも奈良時代には既に日本に『三國志』が傳わっていた事がわかる。本章では、日本に於ける周瑜像の變遷について、『三國志』舶來以降から、日本での『演義』初の翻譯本である『通俗三國志』(元祿四(一九六二)年)(※後述の注10を参照。)が登場する以前までを見ていく。

さて、では周瑜についての記事が日本に於いて一體いつ頃から出たのかと言うと、現在確認する範囲で最も早いのが『和漢朗詠集』⁷⁾の記述である。以下にその作品を挙げる。

菅原文時(八九九―九八一年)「鶯」

燕姫之袖暫收。猜撩亂於舊柏。周郎之簪頻動。顧問關於新花。(燕姫の袖、暫く收りて、撩亂を舊柏に猜む。周郎の簪、頻りに動き、顧問を新花に顧みる。)

これは先述の『三國志』周瑜傳における「周郎顧曲」の故事を踏まえた作品である事が分かる。『和漢朗詠集』における三國故事について

て、田中尚子氏は『和漢朗詠集』中の三國を詠んだものは内容に偏りがあり、風流・教養面のみが取り上げられている。」と指摘されている。⁸⁾『和漢朗詠集』には他に曹操・曹丕にちなんだものがそれぞれ二首ずつあるが、三國の故事を詠んだものはそれら四首と、この周瑜についての作品を合わせた合計五首のみである。『和漢朗詠集』以降、三國志の享受は『太平記』や『応永記』などの軍記物にしばしば散見されるのだが、その中に周瑜を特筆して挙げたものはなかなか見出すことは出来ない。管見ながら文學作品という形で周瑜を特筆しているものは、日本に『三國演義』が傳わり翻譯されてからを俟つかないようである。⁹⁾では續いて、その翻譯本である『通俗三國志』登場以降、周瑜はどのような形で描かれ、評價されているのか。次章で見ていくこととする。

四 『通俗三國志』成立以降の周瑜像

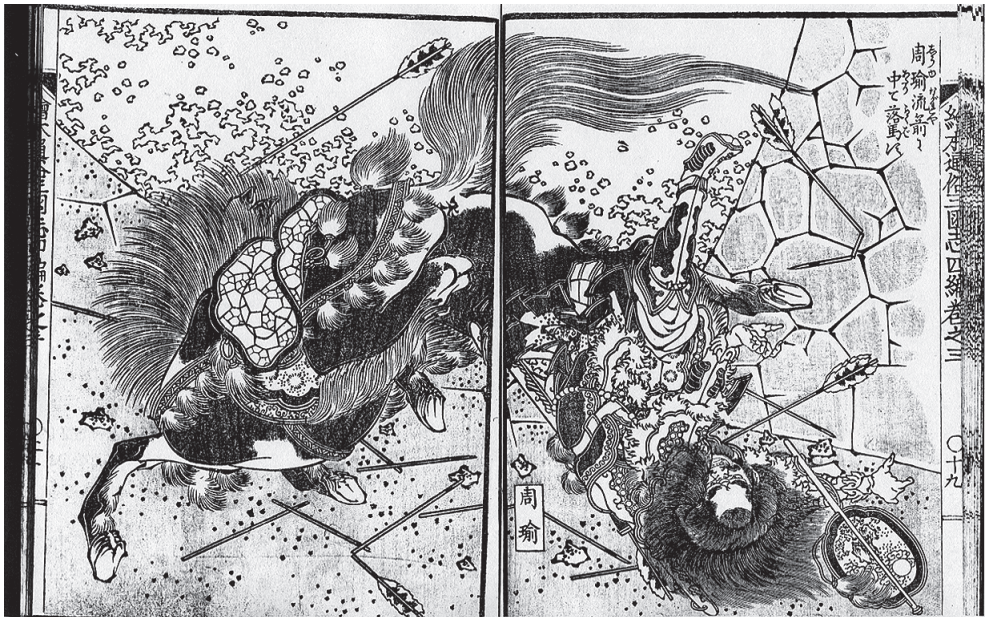
日本初の『三國演義』翻譯は湖南文山によってなされたとされている。¹⁰⁾これこそが『通俗三國志』(元祿四、一六九一年刊)である。この翻譯本の登場により、人々の間に物語(小説)としての「三國志」というものが大いに広まっていき、今日の日本に於ける三國志人気を、より決定づけたものと言って過言ではないだろう。以後、歴史書としての『三國志』と小説『三國演義』は、少なくとも民衆の間ではあまり區別されることはなかったようである。つまり『三國志』と一口に言っても、民衆間では實際には小説の方を指していたりもするのである。

(一) 『通俗三國志』と『繪本通俗三國志』内の周瑜の描かれ方¹⁾

『通俗三國志』刊行からおよそ一五〇年後、その文章をほぼそのままに多数の挿繪を付加して出来た作品こそが『繪本通俗三國志』である。(天保七十二年刊。校正は池田東籬、挿繪は葛飾戴斗。)ここではこの『繪本通俗三國志』内での周瑜の描かれ方を見てみよう。以下にその挿繪を数枚列挙する。



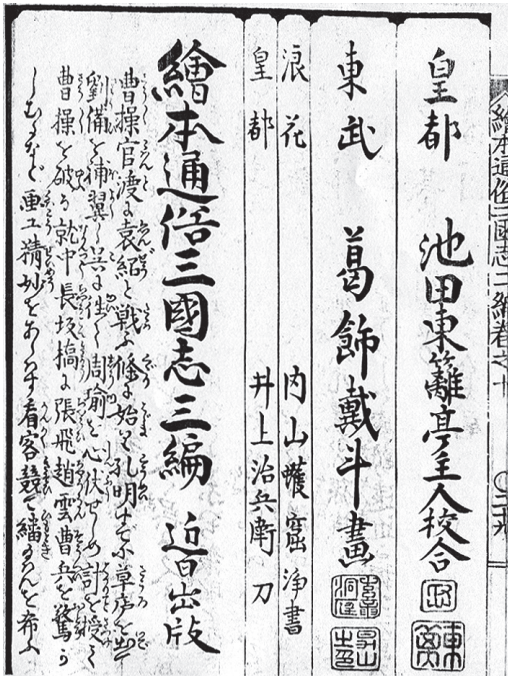
まずここに挙げた二幅の畫は、各巻頭に付随している人物紹介圖である。(※比較する便宜上、二枚を並べただけで、實際はこの二幅は續いた頁にあるのではない。)ご覧の通り孔明は卷物を手にし、いかにも知略智謀に富んだ軍師の如く描かれている。更には獅子のような動物に乗っており、一種の神聖性ともいべき風格を醸し出している。ちなみに他の人物紹介でこのように獅子のような動物に乗っている人物は無く、動物に乗って描かれていたとしても、せいぜい乗馬した畫であり、現実的な繪であると言える。²⁾一方周瑜は「美周郎」とは言い難い容貌で描かれている。



さて、『繪本通俗三國志』は全八編七五冊に成る大著であるが、各編の末尾に次編の予告が収録されている。本編に氣を取られがちだが、當時の事情を知る為、この予告篇に着目してみたい。

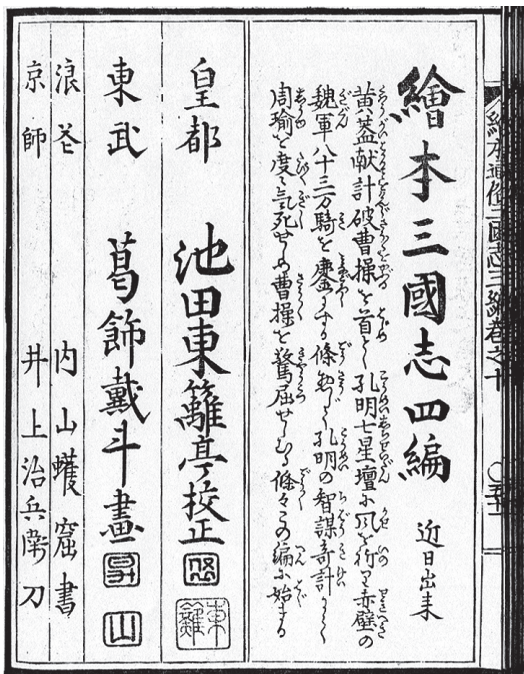
以下に挙げたものは第三編巻末に收められている四編の予告であるが、「黄蓋計を獻じて曹操を破るを首とし、孔明七星壇に風を祈りて赤壁の魏軍八十三万騎を塵にする」とある。また同様に第二編巻末に収録の第三編予告には「曹操官渡の袁紹と戦ふの條に始まりて、孔明云々」とあり、全ての功績が孔明の手によるものとして強調されている。

第四編は「黄蓋獻計破曹操」から始まり「黄忠魏延大争功」までが収録されている。その中で「七星壇孔明祈風」と「周瑜赤壁塵魏兵」



は別の條として立てられており、赤壁で魏兵を塵にしたのは周瑜であると題目に明記されている。しかし、上述の予告篇では、赤壁の魏兵を塵にするのは七星壇にて祈祷し、風を呼び込んだ孔明一人の手柄であるような表記をされてしまっている。つまりこの予告からも孔明鼻が見えてとれ、赤壁の一番の功勞者が孔明であると捉えられていることが分かるのである。

そもそも巻末の予告というものは、あくまで次巻を購入したいという購買意欲を読者に湧き立たせるためのものである。換言すれば、次巻で周瑜が活躍するという予告よりも、孔明が活躍すると告げた方が客が食いつきやすい、との考え方を書肆が持っていたということである。



(二) 川柳に詠われる『三國志』民衆にとっての『三國志』

ここまで見てきたように、翻譯本『通俗三國志』と更にそこから發展した『繪本通俗三國志』等を通して、民衆の中に益々『三國志(演義)』というものが浸透していったことは明らかである。では實際に、民衆は『三國志(演義)』というものをどのように捉えていたのだろうか。ここでは川柳から、當時の人々の考え方を探ってみようと思う。以下は『誹風柳多留』¹³⁾などの川柳集からの一例である。

- ① 「玄德は痒い所へ手が届き」
- ② 「三國志書翰の所は飛ばすなり」
- ③ 「孔明が死んで夜講の入りが落ち」

これらはほんの一例であり、川柳の中には三國ものを詠った作品が数多く存在する。中林史朗氏に拠ると、「三國志の登場人物に関する川柳は、曹操・劉備・諸葛亮・関羽・張飛・趙雲らを対象にした歌が一五〇作以上も見られ、それらの歌から、一般諸人に『三國志演義』の内容が、良く知られていたことが分かる」とある。¹⁴⁾『演義』の影響を受け、庶民に劉備や孔明たちが馴染みのキャラクターへと變化していったことが見てとれる。②では、『通俗三國志』を讀む際に、長たらしい書翰部分(文山は『演義』を翻譯する際、書翰部分はそのまゝ原文を抜き出して書いている。物語として先を知りたい讀者や聽衆にとって、この部分が煩わしく感じられるのも無理はないだろう)は飛ばして讀むのだ、という人々の有りの盡の態度が見て取れる。また

最後に擧げた「孔明が死んで夜講の入りが落ち」とは、夜講釋で『三國志』をしていたのであろうか、物語中で孔明が死んでしまつてからは(面白みがなくて)客の入り落ちてしまふ、というのである。これらは大變興味深い句であり、當時の民衆がどのように『三國志』というものを捉えていたのかを顯著に表していると言えよう。

しかし残念ながら、これら川柳作品の中に周瑜を特筆した作品を見出す事が出来なかつた。それは同時に民衆にとって周瑜が浸透していない人物であると言えないだろうか。民衆にとっての『三國志』とは『演義』そのものであり、それが全てだったのである。とすれば、『演義』において主役側の劉備や諸葛亮を引き立てるだけの周瑜が、民衆の間でクローズアップされることがないのも仕方のないことである。以下に數例、孔明を題材とする作品を擧げておこう。

- 「琴をひきやめて孔明舌を出し」
- 「腕づくがとかく孔明きらひなり」
- 「今日も又留守でござると諸葛亮」
- 「先生お目がさめたなと玄德」

右の通り、單に孔明の人物を詠うのではなく、その内容が『演義』に沿っているものであることがお分かりいただけるだろう。

(三) 文人達の周瑜評價と漢詩の中の周瑜

では最後に、當時の文人や知識人達はどのように周瑜像を捉えていたのだろうか。當時の漢詩を見た限りでは、やはり小説の影響を受けか、蜀の人物を詠じたり賛じたりする作品が三國關連のものを詠っ

た作品全体の大多數を占める。江戸時代の漢詩人が、三國故事や人物（特に關羽や諸葛亮）をどのように詠っていたのかについては長尾直茂氏の研究が大變詳しい。¹⁵⁾では周瑜についてはどうかといえ、關羽や諸葛亮などの蜀陣營の人物に比べ、壓倒的に分量が少なくなる。その中の一例を幾つか示しておこう。

○頼山陽（一七八〇—一八三二）「詠三國人物十二絶・周瑜」¹⁶⁾

東風燒盡北軍船，煙滅長江不見痕。怪得頻頻曲邊顧，還無一顧向中原。（東風燒盡す北軍の船、煙滅して長江に痕を見ず。怪しみて頻頻として曲邊に顧みるも、還た一として顧りみて中原に向かふ無し。）

頼山陽は『演義』の中で狹量な人物となってしまった周瑜ではなく、歴史書『三國志』中の、史實の周瑜像を描いていることが見てとれる。このほか「三國志演義序」で、以下のように述べている。

門人以其俗陋，難之曰，清士大夫有謬引此中一事為典，猶招人嗤譏。況為之序也。余聞而哂曰，許之。今人動舉其迂僻經義，陳熟詩文，無痛痒於世者，梓而行之。纔揭一紙，人輒思睡。視之此書，孰俗陋、孰雅正、孰臭腐、孰神奇。吾寧舍彼取此。（門人其の俗陋を以て、之を難じて曰く、清の士大夫、謬って此の中の一事を引きて典と為す有らば、猶ほ人の嗤譏を招かん。況んや之の序を為るにおいてをや。余聞きて哂ひて曰く、之を許さん。今人、動（やや）もすれば其の迂僻の經義、陳熟の詩文、世に痛痒無き者を擧げ、梓して之を行ふなり。纔かに一紙を掲ぐれば、人輒ち睡

を思ふ。之此の書を視れば、孰か俗陋、孰か雅正、孰か臭腐、孰か神奇たらんや。吾寧ろ彼を捨て此を取らん。）

山陽のこの短い文だけを見ても、彼の漢文や歴史に對する見識の廣さとその思想が窺える。これについて長尾氏は「詩文に小説中の語句を隻語たりとも用いればその俗陋を嗤譏さるることを承知しつつも、そうした見解を齒牙にもかけず、通俗小説、すなわち『演義』を支持する立場を明確に述べている。」¹⁷⁾と述べておられる。實際、山陽は上に擧げた十二絶の他の人物、例えば張飛についての句で「蛇矛欄住萬蹄塵」と詠じている。「蛇矛」とは『演義』など、創作ものに登場する張飛の得物であつて、決して史書『三國志』には出てこない架空の武器である。つまり、一部では史實から、また一部では『演義』などによる）創作からの題材を用いて詩作しているのである。なにもこれは山陽に限ったことではなく、當時の知識ある漢詩人たちは、それを分つていて歴史と創作の中から題材を自由に拾ひ集めていたのではないだろうか。續いて以下に三作品擧げておこう。

○木下順庵（一六二一—一六九八）『錦里文集』卷十八「周瑜」¹⁸⁾

赤壁奇捷，火德不寒。醇醪有毒，醉倒老瞞。（赤壁の奇捷、火徳寒からず。醇醪有毒有りて、老瞞を酔倒せしむ。）

○市河寛齋（一七四九—一八二〇）『寛齋先生遺藁』卷一「東坡赤壁圖」
孤舟月上水雲長，崖樹秋寒古戰場。一自風流屬坡老，功名不復畫周郎。（孤舟月上、水雲長し、崖樹秋寒、古戰場。一たび風流を坡老に屬してより、功名、復た周郎を畫かず。）

○頼杏坪（一七五六—一八三四）『春草堂詩抄』巻七「高山彦九郎」

一生慷慨嘆興亡、扼腕常過古戰場。誰識風流滿眼世、汝家赤壁畫周郎。（一生の慷慨、興亡を嘆く、扼腕して常に古戰場に過る。誰ぞ識らん風流、滿眼の世を。汝家（なんぢ）は赤壁に周郎を畫けり。）

（※なお、この後に前述の市河寛齋の「東坡赤壁圖」を注として引用している。）

右三作品のうち、特に市河寛齋と頼杏坪の二作品は、當時「赤壁の戦い」がどのように捉えられていたかを考える上で非常に重要な作品であるといえるだろう。市河寛齋の末句「功名不復畫周郎」は、赤壁の戦いにおける周瑜の歴史的功績が蘇軾の「赤壁圖」には描かれていないことを如實に述べているのである。

また、頼杏坪の詩題にある高山彦九郎とは、現在京都市三条大橋にある土下座像（實際は土下座している譯ではないが）で有名な人物であり、寛政の三奇人の一人として数えられる人物である。「奇人」とは勿論現在の日本語で用いられる「奇人・変人」や「奇妙」といった類の意味ではなく、「他とは一線を畫した特別な」という意味で考えていただいた方が良いだろう。末句の「汝家赤壁畫周郎」が、正に當時の周瑜に對する評價を端的に表しているのではないだろうか。つまり「奇人」である高山氏は通例では赤壁圖に描かない周瑜をわざわざ描いている、というのである。

ちなみに赤壁圖は主に江戸中期以降の南畫において題材とされる事

が多くなつたとされているが、それは蘇軾の「赤壁賦」を題材に描く畫を意味している。つまり、「赤壁圖」といっても、三國時代の赤壁の戦いそのものを描くのではなく、「蘇軾が思いを馳せた赤壁」とどまっているのであり、三國時代まで立ち返ったものではない。そうならば當然、三國時代に赤壁で戦っていた周瑜や曹操達も描かれることがないのが通例のようである。

この他、以下に大槻磐溪の作品を挙げておこう。

○大槻磐溪（一八〇一—一八七八）『寧靜閣集』第四集「周瑜」

周郎一炬萬船空、赫赫高名赤壁風。恨殺當年黃蓋策、無人豔說積柴功。（周郎の一炬、萬船空し。赫赫たる高名、赤壁の風。恨殺す當年の黃蓋の策、人の積柴の功を豔説する無きを。）

如上から、當時の文人たちの間では三國の赤壁の戦いに於ける主役は、周瑜であると捉えられていることが見てとれる。ここに民衆との認識にズレが生じていることは明らかである。主に『通俗三國志』の中から周瑜を評價している民衆と、歴史書を踏まえて周瑜を捉えている文人の間には、その評價に大きな差が生じてしまったのである。

五 おわりに

以上、日本に『三國志』舶來以降、日本における周瑜がどのように描かれてきたのか、その變遷の片鱗を見てきた。『演義』が舶來する以前は周瑜の文化面的な一面をクローズアップして捉えられているものの、「赤壁の功勞者」としての軍事面での周瑜像は見出せなかった。

また、繪畫の題目として描かれる「赤壁圖」は、三國時代にまで立ち返ることはせず、蘇軾の「赤壁賦」を元にして描くにとどまっていた。さらに『演義』が舶來し、民衆が『演義』の人物像そのままを鵜呑みにする一方で、知識ある文人達は、史實に基づいた本来の周瑜を認識し、正當な評價を下していたのである。明治以降も同様の傾向が續くようであるが、それは今後の課題としたい。

注

- (1) 土屋文子「龐統と諸葛亮・三國故事における軍師像の變遷」『中國文學研究』二二期（一九九五年）や渡邊義浩「諸葛亮像の變遷」『大東文化大學漢学会誌』三七（一九九八年）等参照。周瑜以外の人物像の變遷が解説されるとともに、その影響によって周瑜の人物像の變遷にも触れられている。
- (2) 正史『三國志』テキストには、中華書局版を用いた。
- (3) 『李太白文集』・『樊川文集』・『詠史詩』・『東坡全集』・『松雪齋集』・『石田文集』・『古城集』・『洪龜父集』・『栢欄集』・『龜溪集』のテキストには景印文淵閣四庫全書（臺灣商務印書館）版を用いた。『說唐全傳』は張宇光主編（九州圖書出版社・一九九五年）、『澗谷遺集』は『豫章叢書（清・胡思敬等輯）民國四年至九年 南昌豫章叢書編刻局刊本』内の『澗谷遺集』（民國九年刊・覆羅念菴輯存家乘本）、『遺山樂府』は『景宋金元明本詞』吳昌綬・陶湘編（立命館大學詞學文庫）、『無絃琴譜』は『西泠詞萃』丁丙・編（立命館大學詞學文庫）を用いた。
- (4) テキストとして『新刊全相平話五種』（北京文學古籍刊社・一九五六年）内の『新全相三國志平話三卷』と『三國志平話』（上海古典文學出版社編・一九五五年）を用いた。本文において『演義』と『平話』における周瑜の描かれ方の違いをまとめているが、『平話』における周瑜の扱いが一目で分かる部分が以下の部分であり、周瑜軽視が見てとれる。『平話』卷之中「赤壁慶兵自古雄，時人皆恁畏周公。（時人，皆恁（なん）ぞ周公を畏れんや）天知鼎足三分後，盡在區區黃蓋忠。」
- (5) 以下、雜劇のテキストとして『孤本元明雜劇』王季烈・輯（長沙商務印書館・據明鈔本等排印三二冊・民國三〇年）、『古本戲曲叢刊四集』古本戲曲叢刊編輯委員會・輯（上海商務印書館景印本・一九五八年）等を用いた。
- (6) 紙幅の關係上本論では詳しく述べなかったが、雜喉潤氏の『三國志と日本人』（講談社・二〇〇二年）等に詳細な研究がある。また、『三國志』舶來と同時期に『世説』などの書物が日本に舶來していたとする説もある。大庭脩・編著『江戸時代における唐船持渡書の研究』（關西大學東西學術研究所・一九六七年）参照。
- (7) テキストとして『新編日本古典文學全集一九』（小學館・一九九〇年）、『和漢朗詠集』佐藤道生・校注／『新撰朗詠集』柳澤良一・校注（明治書院・二〇一一年）を使用・参照した。
- (8) 田中尚子『三國志享受史論考』（汲古書院・二〇〇七年）参照。
- (9) 周瑜の描寫は見いだせないが、「赤壁」をテーマにしたものであるならば五山文學の中に見出すことが出来る。
○絶海中津（一三三六—一四〇五）「讀杜牧集」
赤壁英雄遭折戟，阿房宮殿後人悲。風流獨愛樊川子，禪榻茶煙吹鬢絲。
だがこの作品は、先ほども例で挙げた杜牧の『樊川文集』卷四に収められている「折戟沈沙鐵未銷，自將磨洗認前朝。東風不與周郎便，銅雀春深鎖二喬。」の「赤壁」という作品の一部を一句目に使用したのみで、三國の「赤壁」そのものを詠っているのではない（二句目は杜牧の「阿房宮賦」から元になっている）。よって上述の通り、この作品から三國人物をどのように捉えていたのかまでは分らない。
- (10) 文山は『李卓吾先生批評三國志』を元に譯したとされているが、この邊りの説については幸田露伴・小川環樹氏などにも詳細な研究がある。また、長尾直茂氏は「近世における『三國志演義』—その翻譯と本邦への傳播—」（『中國文學解釋と教材の研究』學鐙社・二〇〇一年）において「基本的に李卓吾本をもとにしてしているものと考えられるが、部分的に独自の譯文を挿入した痕跡がみられる」との考えを述べられている。この『李卓吾』本のみを底本に逐語譯したかどうか等については、ひとまずここでは問題にしない。また、『通俗三國志』の正確な成立年代にも諸説が存在する。
- (11) 『通俗三國志』のテキストは塚本哲三・編『通俗三國志』（有朋堂書店・一九一七年）を用いた。また、『繪本通俗三國志』のテキストは立命

館大學所藏の池田東籬・校、葛飾戴斗・畫『繪本通俗三國志』（天保七・一八三六—一八三七年）を用いた。

(12) 『繪本通俗三國志』の挿繪は、従来の「三國志」諸作品とは大きく異なる点がある。これについては渡辺由美子氏の「『繪本通俗三國志』について—その挿繪と成立事情—」（『文學論叢』六十八号・一九九四年）に詳しい。また、上田望氏は「日本における『三國演義』の受容（前篇）—翻譯と挿繪を中心に—」（『金澤大學中國語學中國文學教室紀要』九号・二〇〇六年）に於いて、前述の渡辺氏の論文を引用した上で、「戴斗は四百幅のうち、百幅以上は名場面と言われるものをしっかりと取り上げ、残りの挿圖で彼の技量と個性を發揮したと見るべきである」と述べておられる。更に彼の畫についての注目すべき側面は、グロテスクなまでの残虐性・怪奇趣味と「和風」化であると、詳細な檢證をしておられる。

(13) 『誹風柳多留』のテキストについては山澤英雄・校訂『柳多留・誹風』（岩波書店・一九五〇—一九五六年）、山澤英雄・校訂『誹風柳多留拾遺』（岩波書店・一九九五年）を参照した。

(14) 中林史朗「日本人に於ける三國志とはく見るのか読むのか、江戸から現代まで」（『大東文化大學漢學會誌』四八号・二〇〇九年）参照。

(15) 長尾直茂「伊藤仁齋、東涯父子の諸葛孔明觀」（『漢文學解釈と研究』第三号・二〇〇〇年）、同氏「江戸時代の漢詩文に見る關羽像—『三國志演義』との關連に於いて—」（『日本中國學會報』第五十一集・一九九九年）など参照。また長尾氏は「江戸時代の繪畫における關羽像の確立」（『黄檗文華』一一九号・一九九八年）において江戸の繪畫文化からも關羽の人物像を詳細に研究されている。

(16) テキストとして伊藤靈谿・注釋『山陽詩鈔新釋』（書芸界・一九八五年）を参照した。また、「詠三國人物 十二絶句」は先主（劉備）・孔明・關羽・張飛・趙雲・本初（袁紹）・孟德（曹操）・仲達（司馬懿）・荀彧・仲謀（孫權）・周瑜・管丁の十二人について詠じたものである。關羽に對しては以下のよう

詠三國人物 十二絶句

關羽

北伐長驅不備吳、
髯公終被阿蒙愚。
問君曾讀春秋日、

北伐長驅して呉に備へず、
髯公終に阿蒙に愚にせらる。
問ふ君曾て春秋を讀むの日、

却記秦人殺役無。却た秦人殺の役を記するや無（いな）や。
ちなみに諸葛亮に對する絶句は以下の通り。
同十二絶句 孔明

有魚頼尾泣窮冬、
魚有りて頼尾窮冬に泣き、

涸轍無人憐唵喞。
涸轍人の唵喞を憐れむ無し。

誰料南陽半溝水、
誰か料らむ南陽半溝の水、

養渠忽地化為龍。
渠を養ひて忽ち地化して龍と為るを。

尚、頼山陽『山陽遺稿』（文）卷三に「高山彦九郎伝」があり、山陽自

ら高山の出自、來歴について述べている。その傳に抛れば、どうやら山陽

は幼少の頃より、父である春水から彦九郎の話をよく聞いていたそう

で、春水と彦九郎は深い交わりがあったようである。以下にその一部を示そう。

高山正之、上野人也。字彦九郎、家世農。正之生而俊異、喜讀書、略

通大義。爲人白皙精悍、眼光射人、聲如鐘。有奇節。（中略）少入平

安、至三條橋東、問皇居何方。人指示之。即坐地拜跪曰、草莽臣正之。

行路聚觀怪笑、不顧也。遊京郊、過足利高氏墓、數其罪惡、大罵鞭之

三百。（中略）外史氏曰、予幼、聞先人善談彦九郎。先人亦嘗數相逢

三都聞。記其鄉貫、係新田郡細谷村人。先世蓋屬南朝者。其好義不無

所自云。（中略）先人嘗欲爲之傳、不果。近讀或書正之事、疑爲不軌之民、

冤矣。予故略敘所聞如此。

(17) 前掲の長尾氏の論文「江戸時代の漢詩文に見る關羽像—『三國志演義』との關連に於いて—」を参照。

(18) 『錦里文集頼杏坪』のテキストは木下一雄・校譯『錦里文集』（國書刊行會・一九八二年）を用いた。また、市河寛齋・頼杏坪・大槻磔溪の各作品については『江戸詩人選集』（岩波書店・一九九〇年）を用いた。

（立命館大學大学院文學研究科博士後期課程）

